

氏名(本籍)	相馬伸一(北海道)		
学位の種類	博士(教育学)		
学位記番号	博乙第1667号		
学位授与年月日	平成12年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	教育学研究科		
学位論文題目	ハートリブ・サークルの知の連関における教育思想の形成 —デカルト哲学との邂逅を中心に—		
主査	筑波大学教授	博士(教育学)	山内芳文
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	福田弘
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	宮寺晃夫
副査	筑波大学教授	博士(文学)	佐藤臣彦
副査	筑波大学教授	博士(文学)	谷川多佳子

論文の内容の要旨

本論文の課題は、ヨーロッパ17世紀教育思想の哲学的特質を、デカルト哲学との関連において理解することである。その理解の作業に先だっては、デカルトの哲学において、それが理性を生得の能力ととらえ、その指導方法を研究したゆえに、本質的に教育的な性格を帯びているという前提がある。ここでそのデカルト哲学との対比においてとりあげられるのは、その知識活動を媒介したハートリブに因んでハートリブ・サークルと呼ばれている知的共同体に属するデュアリとコメニウスで、彼らは、ともに社会的混迷の克服を教育改革に見だし、それぞれデカルトと直接間接に議論を交わし、またそれぞれに独自の教育思想を展開させていた。本論文は、その課題に対して、これまでの当該思想史研究の成果を批判的に検討しつつも、書簡や手稿を積極的に用いて、教育思想がひとつの理念として形成されるさいの知的な実践の過程に注目する。

本論文の構成は、以上のような課題の設定、先行研究の吟味、さらには課題解決の方法について述べた序章にあたる第1章につづいて、以下のとおりである。

第2章. 教育思想の形成基盤としての啓発の共同体

—ハートリブ・サークルとその周辺—

第3章. ジョン・デュアリの教育思想における哲学的基盤

—デュアリとデカルトとの邂逅をとおして—

第4章. コメニウス教育思想の哲学的基盤

—コメニウスデカルト関係再考—

第5章. デカルト哲学と17世紀教育思想

第2章では、ハートリブ・サークルの活動がその「相互啓発」性において焦点化され、それはつぎのように明らかにされる。ハートリブ・サークルが教育思想の母胎となった背景には、多様な信念の独立と共存をめざす一種のコミュニケーション倫理「相互啓発」があり、それはハートリブの主導で文通網を組織し、宗教対立の和解・教育改革・情報交換等にとりくんだ。普遍的な学術振興期間の設立構想こそイギリス内線の勃発で実現しはしなかったが、彼らのサークルからはミルトンやペティらの教育思想が生み出された。彼らが、宗派性・党派性を越えた知の出会いを媒介できたのはこのゆえであった。彼ら、ことにデュアリやコメニウスとデカルトとの邂逅も

その所産といてよい。

第3章では、キリスト教諸教会間の和解にとりくむ一方、イギリス内戦期における最も体系的な教育論『改革された学校』を著すなど教育にも関心を示していたデュアリがデカルト哲学に邂逅することによって、その教育思想を形成するさいの哲学的なモチーフを獲得したことが明らかにされる。彼がデカルトと会談したのは1634年から35年にかけての冬であり、そのテーマは物理的世界の存在・神の存在・真理探求の方法というデカルト哲学と密接に関連することがらであったと認められるが、哲学的見解を異にする両者の邂逅は、従来あまり実りのないものとされてきたという。しかしながら、本章では、デュアリが清書解釈法の模索から人間認識の構造を省察する必要性を認識し、感覚→想像力→記憶力→理性という従属関係に基づく一種の能力心理学を提示していたことに着目し、そこに発達段階・教育内容の配列原理・段階的な教授システムの展開の基礎が確認される。デュアリの教育思想においては、学習論的側面は教授論的側面に包摂されている、というのである。

第4章では、コメニウスとデカルトとの邂逅が主題となっている。汎知学における神学的事項と世俗的事項の混同、人間の学習可能性への楽観的態度を批判していたデカルトと教授学から汎知学へと関心を微妙にスライドさせていたコメニウスとの会談は、これまでの双方の研究史において、その事実以外にはまったく知られていなかった。本章では、いくつかの状況証拠とでもいべき断片を手がかりとして、両者の会談後、つまり1642年以降のコメニウスの思想的な変化が注目される。そこからは、コメニウスが人間精神を世界との連関においてとらえる限り、人間精神はデカルトが言う感覚的誤謬や伝統的先入見からのがれ得ず、これらの問題に対処するには、矛盾した世界から画された空間をつくり出さなければならないということが明らかにされる。本章の結論は、以下のとおりである。コメニウスが学校論や教授論を考察したのは汎知学の哲学的前提が要求するものであり、彼はその汎知学構想において事物と言語の乖離・学校と生活の乖離・教師＝生徒関係の権威化の克服を課題としていた。さらに、コメニウスは教授論の必要性を認識してはいたものの、それがはらむ問題から、学習それ自体を考察し、生涯学習論とでもいべき学校改革構想を展開させるにいたった。

第5章では、デカルト哲学によって逆照射されたハートリブ・サークルの教育思想の歴史性が論じられる。ここでは、デカルトにおける教育の思想的な含意は、方法的懐疑が要請する心身分離による知性的認識の確立において、そのプロセスとしての「自己教育」に照準されており、その教育的見解は中世以来の学習論に真理探求の方法論としての哲学的基盤を与えるものであって、ここから学校教育や教育関係に対する彼のラディカルな批判を理解することができる、と指摘されている。しかし、そのようなデカルト哲学の教育的な含意にもかかわらず、それが教育関係や発達の観点を欠いている限り、そのまま教育思想としてハートリブ・サークルには受容されえなかったことにも論及される。そして、デュアリやコメニウスがこれらの要求に応じて教育の理論的考察にとりくむことができたのは、彼らの哲学的見地が感覚を重視する経験論的立場と理性を重視する合理論的立場を止揚するものであったことによるとされる。理性への限定的な評価と感覚の認識論的な許容によって、デュアリやコメニウスが教育関係を考察し、子どもの発達に注目し、理性のみならず言語や身体的行為をも教育課題としてとらえることができたということ、そして人間が人間を教育するという近代教育が自明としている前提は、そのような哲学的近代への抵抗と対処のなかから確立されたものであると結論される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、内外の当該思想史研究の成果を批判的に検討しつつ、また書簡や手稿などの第一次資料を積極的に活用して、17世紀のヨーロッパを特色づける知の共同体、ハートリブ・サークルの教育思想がデカルト哲学との「邂逅」を通してひとつの理念として形成されるさいの知的な実践の過程を鮮やかに描出している。そして、それによって、デュアリやコメニウスとデカルトとの交流の実態など、いくつかの事実を新たに推定しえたこと、さらにことにコメニウスの教育論における学習論的な位相への注目の必要性を根拠づけたことは、教育思想史の通

説に再検討を迫る研究として評価される。

なお、その対照性によってハートリブ・サークルの教育思想の歴史的な性格を明らかにする媒介的な役割を与えていたはずのデカルト哲学についての叙述が現代の研究動向の一面に依存していること、また何をもって「邂逅」というのか、その規定について曖昧さが残ること、そしてその内実を確定しうるまでにはいたっていないこと、さらにコメニウスの教育論において学習論を強調する教育思想史な意義について論及が不十分であることなどのいくつかの問題的な指摘されうるものの、それらは今後の課題として、あらためて新たな研究の発展に期待すべきものであり、本論文自体への評価を減ずるものではない。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。